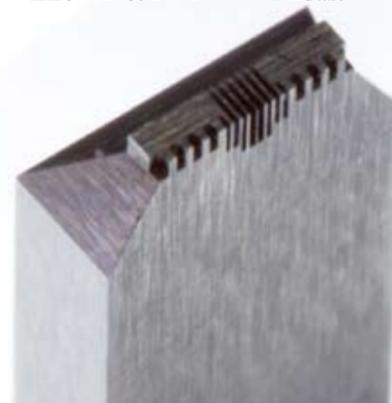
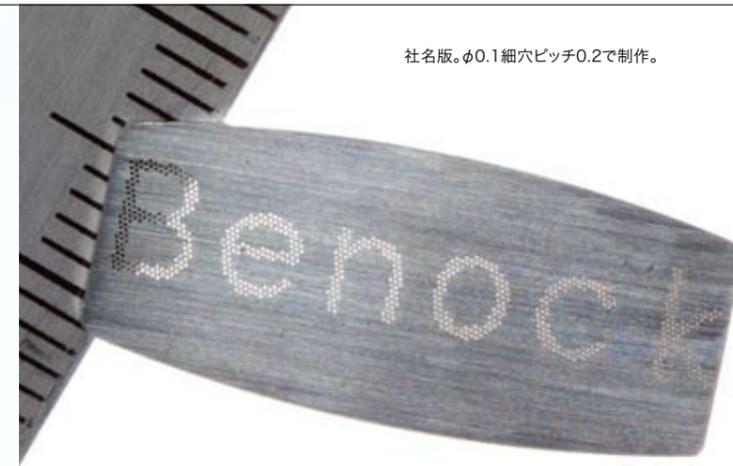




コネクタの金型(コアピン)。ピッチ0.1のくしば加工技術。



社名版。φ0.1細穴ピッチ0.2で制作。



## 計画を立て、それをどれだけ自分の人生に

## トレースできるか

ラグビー以外にも潤をとらえたものがある。それは理数系の学問だった。べつに一生懸命勉強したことはない。けれど数学・物理・科学といったあたりには強かった。「将来は科学者なんていいやんか……」漠然とそう思ったりした。

もうひとつは映像。とくに米・伊合作のギャング映画『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』の、過去と現在を自在に行き来する編集の妙にうならされた。「よし、決めた! 映像作家になった!!」潤の進路の針が大きく一方に振れた。

大阪芸術大学映像学科に入学した潤は、むさぼるように映画を観まくっていた。2本立ての名画座に通いつめ、大学のビデオライブラリーでも映像世界に耽溺した。

一方、自ら動画や写真を撮影することにもめり込む。とくに、レンズに装着するフィルターの組み合わせをかえることで生まれる色温度変換に、科学者・潤は強い興味をおぼえた。

撮影三昧と暗室にこもる日々を経て、やがて卒業後の進路の選択を迫られるときがきた。

—映像作家になるんや!

「しかし、自分にはそこまでの才能がないこともわかりました。アーティストには“技術”と“感性”が必要です。僕には“技術”があった。けれど、僕よりすぐれた“感性”を持つ者がまわりに大

勢いた」

つくる側になることは断念した潤だったが、目利きとしては自負があった。「そうだ、多くのよい映像作品を紹介する仕事に就こう」。しかし、当時はレンタルビデオ全盛期。映画の配給会社は門戸を閉ざしていた。

もうひとつ、当時は小劇場が隆盛に向かう時期でもあった。「ならば、自分の劇場を持とう。そして、小・中学生の感性を育む、素晴らしい芝居をかけよう」——「だが」と潤は思う、「それには資金が必要や」

### 証券マンからモノづくりへ

自分の劇場を持つ資金を得るため、潤は証券会社に就職した。バブル景気真っ盛りだった。1989年12月29日、日経平均株価は史上最高値をつけ、潤は証券マンとしてわが世の春を謳歌した。

だが、膨らみきった泡沫は収縮、日本経済は失われた10年へと突入してゆく。

潤は証券外務員として、景気の悪いときにはそれなりにある程度の成績を上げていた。しかし、勝ちつづけることができないのが株である。損をさせた客が経営する肉屋の冷蔵庫に閉じ込められたり、会社から追加担保をとってくるよう命じられ、祇園の顧客の飲み屋のまえに1日じゅう張りついていた……「そういうことが嫌になったんやなくて、しなくなった(虚しくなった)んですよ、自分を取り巻くマネーゲームがね」

それにくらべてどうだ、日本の株式市場でどんなときでもいちばん最初に高値をつけるのは電子部品メーカーだ。モノづくりこそが不動の国力ではないか!

潤は4年間の証券マン生活を終え、プリント基板の製造会社に就職した。

景気はあいかわらず悪かった。プリント基板だけでは商売にならず、潤は営業担当として、基板まわりの金属部品の注文もとった。しかし、系列会社ではそれがつれない。仕方なく、対応可能な会社を関西じゅうさがしまわった。しかし、やっと見つけた会社も、先方の言うがままではいいように値踏みされてしまう。潤は徹底的に図面を読み込み、研究を重ねた。自分のなかには、まだ科学者の血がうごめいていた。

やがて、適材適所に分担し、適正な価格で発注を行えるようになった。すると今度は、細かいスペックの注文についてはリスクが高く、受けてもらえないことが多くなった。

しかし、難しい注文にこそビジネスチャンスがあるはずだ。これをきちんとマネージメントできれば……

潤は独立を決意する。

### 夢

99年10月1日、潤は京都市北区にベノックを創業した。妻の美佐さんが手伝ってくれた。2人きりでの出発だった。この時期について、潤には独自の目算があった。景気が底をつき、つぎに上昇

へと向かう頃合い——それが創業のときだ、と。証券マンとして培われた潤の勘だった。

かつて母・美智子さんが西陣織の作業場としてついていた自宅の一部を改造。搬入した工作機械を自ら操る。加工機を扱うことにまったく抵抗はなかった。これまで現場作業をする人々を見てきて、「まじめに頑張れば、自分にもつかえるはず」ただそう思った。

モノづくりが10年かかって一人前になれるのなら、ひとの3倍働けば3年でなんとかなるかもしれない。しかし、実際おこなってみると5年かかった。「計画を立て、どれだけ自分の人生をそれにトレースできるか、なんですよ。そしてまた、計画どおりにいかないのが人生。そのときには、持ち直し、仕切り直せばいいんです」

忙しい仕事の合間を見つけては、ラグビーに汗を流すことも忘れなかった。「がががに行くのがプレースタイル」だと言う潤は、からだの大きなラグビーに突進していった。ケガは数知れない。肘があらぬ方向を向いたり、足首を折ったり。右の中指と薬指が手の甲にもぐり込んでしまったときには、工場で研磨していて痛くて困った。これでは仕事に支障をきたす。潤は、泣く泣くフィールドを後にした。

潤の読みどおりベノックはITバブルの波に乗った。2002年1月、南区に本社工場をオープン。そして、ITバブルの

低迷後、潤は新たな動きに出る。求人募集だ。「景気の良いとき、優秀な人材はどうしても大きな企業、ネームバリューのある会社に流れます。うちのように小さいところは景気の悪いときこそ人を獲るチャンスなんです」

小さい会社にもそれなりの戦い方がある。ラグビーで、からだの大きなフォワードの足元に飛び込み、相手を倒すように。

07年、第二工場完成。会社の規模は順調に大きくなっているが、「内容としてはよかったり、悪かったりの繰り返し」だと言う。「僕はあきらめの悪いほうですね。子ども時代ケンカして泣いても、降参しなかった。負けだと思ったら負けなんやね」

ところできいてみたいことがあった。スーパーカーのことで。手に入れましたよ。ジャガー・XKを。34歳のときやった。でも……」そこで潤は意味深な笑みを浮かべた。

新車を入手して2週間目。雨上がりの道を走っていた。夜の11時過ぎだった。仕事のストレスもあって飛ばしていた。坂道を上りきり、下りに差ししかかったところで、ジャガーのお尻が振れた。そのまま大きくスピンし、両サイドが往復ビンタのようにガードレールにがつんがつんと4度ぶつかった。ひどいありさまだった。スーパーカーは廃車に。それでも潤がケガひとつ負わなかったのは、ラグビーで鍛えた頑健さゆえか。

さて、もうひとつの夢である。「劇場の件ね、いつか実現させますよ。自分がいまあるのは、幼少期の環境にあると思うんですよ。自由に可能性を追求する自分を育ててくれた、おふくろ、親父、おじいちゃん、おばあちゃん、お姉ちゃんが出てくれたからです。そうした感謝をこめて、子どもの感性により影響を与えるものを見せる劇場をいつかオープンしますよ。それは僕の計画のなかですでにあるものやからね」

(取材・文=上野 歩)

### Company Profile

◆会社名	ベノック株式会社	◆事業内容	機械加工(微細品対応、放電加工)、微細品(5mm以下)の射出成型をはじめとする金型製作など
◆所在地	京都市南区上鳥羽仏現寺町35-2	◆得意&特異技術	豊富なNC加工設備、全行程のNC化の推進、微細加工に対応した設備、微細加工技術
◆TEL/FAX	TEL: 075-692-3355 FAX: 075-692-3344	◆注文・製品に関するお問合せ	担当: 代表取締役 奥田潤 TEL: 075-692-3355
◆創業	1999年		
◆資本金	500万円		
◆従業員数	14人		